

1. 活動参加者

指導教員:総合政策学部専任講師 野中 葉
環境情報学部生:12名
総合政策学部生:16名
政策・メディア研究科大学院生:1名

なお、助成金の対象となる本塾学部生28名の氏名は「活動参加者名簿」に表記されている通りである。

2. 活動経過

本活動は2018年7月28日から29日にかけての2日間にかけて、WeBase鎌倉という場所で開催した。具体的な行程の段取りは「活動期間中のスケジュール」に記載されている通りである。

合宿活動は野中葉研究会1と研究会2の合同で行うものとする。研究会1の活動内容は重要文献の輪読を通じ、東南アジア地域の社会や文化の概要を学び、自身の関心領域に関わる文献を読み解いて、研究テーマを精査、研究を遂行していくことだ。また、研究会2の活動内容は、グループでのフィールドワーク、メディア・SNS分析などを通じ、日本における外国人の受入状況、海外での日本の紹介のされ方などを調査し、課題を抽出し、各方面に対する提案を行うことで「おもてなし」を超えた日本における共生を目指すために3つのプロジェクトが存在する。3つのプロジェクトの詳細は、特に東南アジアからの留学生や観光客およびイスラーム教徒をターゲットに、様々な情報発信の実施を目的とした①東京近郊でイスラーム教徒向けメニューを提供しているハラール・レストランを検索できるアプリ「Halal Guide Tokyo」の開発とコンテンツの充実、②東京近郊でのムスリム対応サービス情報を掲載する Facebook ページ「Welcome Muslim Friends」のための情報収集と記事掲載、③イスラーム教徒向け東京観光 One Day Model ツアーの作成「Musli-map」である。

まず、政策・メディア研究科大学院生と卒業論文の執筆を既に終えた学部生が各々の研究報告を行い、今後卒業論文の執筆を行う学部生に向けて、その研究手法の解説や、研究の意義について発表した。次に、2日間に亘って、ポスターセッション形式での2018年秋学期に卒業論文を執筆する学部4年生による発表と、通常のスライドを利用したプレゼンテーション形式でのその他の学生による研究・活動報告が行われた。各発表の合間には、担当教員である野中専任講師による指摘・感想や、学部生による研究会の垣根を超えた活発な議論が行われた。以上の行程の時間外にも積極的な交流を通じて双方の研究会に対する理解を深めようとする試みも見られた。

3. 成果

本活動の目的は、大学構内での講義で個々に活動している研究会1・2が、合宿という別途設けられた期間にそれぞれの学期の最終成果を発表し、意見交換することで今後の研究会での個々の活動をより良いものにするにある。

実際に、合宿活動中は研究会1・2合同で発表を行うことで互いの視点による意見交換が活発に行われた。主な成果を以下3点に分けて記述する

A,合宿における発表に向けての研究進捗、活動報告準備

合宿参加者は本合宿を学期の最終成果発表とし、発表に向けてそれぞれの研究を進捗させ、学期内の研究活動内容をまとめた。同時に、2017年度春学期卒業者の卒プロ2成果発表を行うことで、発表者は卒業プロジェクトを完成させ、これまでの研究の軌跡とその研究内容を発表報告した。さらに、卒プロ2発表者は自身の卒論を執筆した経験を踏まえ、その他の履修者に対し研究、論文執筆時のアドバイスを研究内容と同時に発表した。

卒プロ1発表者はポスターセッション形式での発表を行った。ポスターには自らの研究概要とその内容を簡潔に表現しなければいけないため、これまで各自が研究してきたことを踏まえ、卒プロの執筆を念頭に置いた具体的な研究概要と構成を各履修者は練ることが求められ、それぞれ研究の進捗を生んだ。また研究内容の進捗だけでなく、ポスターセッションでは研究内容を初めて知り、聞く人に対して自らの研究内容を簡潔にポスターの中で表現し、それを使った限られた時間の中での口頭説明しなければならないため、各履修者はそれぞれ情報の取捨選択やその内容の表現を工夫して合宿での発表に臨んだ。11月のORFにおけるポスターセッションを念頭に置いたポスター資料の作成やポスターを使ったプレゼンテーション方法の習得も本合宿で学んだ。

B,合宿以後の活動に向けての目標と活動方針の確立

その他の履修者はこれらの発表から各自の研究をどのように卒プロとして完成させるかを学んだ。ポスターセッションによる発表を通じて、多くの学生が卒業論文の結論の出し方や調査手法に関してそれまで曖昧だったことに対して、客観的でそれまでに出なかった意見から、新たな切り口を見つけることが出来た。

また、研究会2は、意見交換を通じて3グループで行っている各活動をどのように進めていくか、その改善点などを明確にすることが出来た。まず、①「Halal Guide Tokyo」に関しては、限られた店舗数の問題と領域を東京に限定することの意義について問われたことを踏まえ、神奈川県のレストランを新たにサービスに追加することを今後の方針に含めた。次に、②「Welcome Muslim Friends」に関しては、各SNSにおける情報提示方法の改善や、更新頻度・時間帯と効果の相関関係についての指摘を受け、今後ユーザーがどうしたらより情報を得やすくなるのか、検討を始めた。最後に、③「Musli-map」に関しては、掲載許諾を得た店舗の調査拡大や、どのような状況でどのような対象に手に取ってほしい冊子なのか、そのターゲット層の明確化、そして頒布促進の手段に関して様々な提案を受けた。どれもその後、学期内での活動で改善策が練られており、意見交換の目的を達成することが出来た。

このように、合宿という場を通じて双方の今後の研究に役立てることができる機会を提供できると考える。また、特に研究会2の活動のようにプロジェクト単位で長期間継続的に続ける活動にとっては、フィードバックをもらうことによって次学期とその先に向けた改善策を見つけるのに有用な機会となった。

C, 研究会1・2、各履修者の交流

本合宿では、各履修者は自らの研究を進めて発表し、それに対してのフィードバックを受けてさらに研究をすすめるのみでなく、他の履修者の多様な研究やそれぞれの研究会の活動報告を聞き、それについて意見を述べて議論を行うことで、多様な東南アジア地域やムスリムへの実践の多角的な知見を得ることと同時に自らの研究の参考となることが多くあった。さらに、研究会1・2との交流の場となることで双方の研究会履修者がどのような研究や活動を行なっているのかの理解を深めた。これは11月のORF時には野中葉研究会として研究会1・2が合同ブースで発表するため、お互いの研究内容について来場者に対して説明ために理解が求められる。通常の学期中であれば知ることのない互いの活動や研究内容を理解する機会としての本合同合宿における活動は非常に貴重なものであった。